

アイヌ文化を未来へつなぐ ～次代のウポポイに向けて～



開業から約10カ月。ウポポイ（民族共生象徴空間）では、さまざまなルーツを持つ人たちが、伝統芸能や手仕事、暮らしの様子や言葉など、アイヌ文化をたくさんの人たちに伝えていこうと、今日も来園者を迎えています。

そこで、今回は次の世代にアイヌ文化をつなげていく重要な役割を担うウポポイの若手職員に集まっていただき、これまでをふり振り返りながら、アイヌ文化を未来につなげていく思いを語っていただきました。

出席者のポンレ（ニックネーム）と所属

- イネトッさん 国立アイヌ民族博物館
- クワンノさん 体験交流ホール
- ケニさん 体験学習館
- フッチポさん 伝統的コタン
- ポロナイさん 体験交流ホール
- ムカラさん 工房
- コーディネーター
- 本田 優子さん 札幌大学地域共創学群教授・アイヌ文化教育研究センター長

（本座談会はウポポイの体験学習館にて、2021年2月2日に開催いたしました。）

出席者の自己紹介

本田 イランカラッテ。今日は、将来のウポポイを担っていく若手ホープの皆さんに集まっていただきました。私は札幌大学ウレシパクラブの代表もしております、本田です。出席者にウレシパクラブの卒業生の顔もあり、大変うれしく思っています。まずは、自己紹介をお願いします。

ムカラ 平取町二風谷出身で、小さなころからアイヌ文化に触れてきました。幼少期に親から呼ばれてきたポンレをウポポイでも使っています。ムカラとは、薪や木を切る斧や鉞おの まさかりのことです。親から家の薪を絶やすことは、男の恥だと教えられてきました。薪づくりは



ムカッ：山道 陽輪さん

男の仕事で、働き者になりなさいという意味でポンレをつけたそうです。

今は工房で、男性の仕事である木彫を主に担当しています。

クワンノ 浦河町出身で、札幌大学に入学してから、ウレシパクラブでアイヌ文化を本格的に学び始めました。今は体験交流ホールで舞踊や歌、楽器などを担当しています。ポンレはまっすぐという意味で、私の性格からつけていただきました。

イネトツ 竹内家の4人兄弟の4番目なので、数字の4を意味するイネと、竹のトツを組み合わせたポンレになりました。札幌大学のウレシパクラブで学び、卒業後もアイヌ文化にかかわる企業や施設で働きたいと思うようになって、ウポポイの前身といえる（一財）アイヌ民族博物館^{*1}、通称ポロトコタンに勤めることになりました。今は国立アイヌ民族博物館の所属です。

5年ほど前に『開発こうほう』の隔月連載「アイヌ文化の振興、現在と未来」^{*2}で、若いアイヌの方々にお話を聞き記事をまとめたことがあり、今日の座談会は二つ返事で参加させていただきました。

フッチボ 札幌生まれ、東京育ちです。母が札幌出身で、祖母が札幌に住んでいます。祖母が大好きだった幼いころのエピソードから、おばあちゃん子という意味のポンレがつかまりました。

東京で働いていましたが、北海道で働いてみたいという話をしていたら、叔母がウポポイを紹介してくれ、採用試験に応募しました。叔母が経営する店でアイヌ

刺しゅうのワークショップやムックリ（口琴）の演奏会などを開催していたので、少しだけアイヌ文化には触れていました。

今は伝統的コタン（以下コタン）に建てられた家屋（以下チセ）でのプログラムを担当しています。チセの中で舞踊などを披露する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症対策のため、夏は外で舞踊を披露しています。また、チセでの暮らしを伝えたり、ムックリ演奏などの伝統芸能も紹介しています。

ポロナイ ポンレは本名の大河をそのままアイヌ語に訳したものです。生まれは香川県高松市で、高校時代に先住民族や少数民族の存在を知り、大学在学中にオーストラリアに留学してアボリジニについて勉強しました。留学時、オーストラリアにおけるアボリジニの地位と、日本におけるアイヌの地位について比較したレポートを提出するようという指示があり、そこからアイヌのことを学ぶようになりました。それまで香川県にいて、アイヌについて勉強したことがなかったことを日本人として恥ずかしく思いました。帰国後もアイヌの勉強を続けていましたが、卒業後も続けたいと北海道に引っ越すことを決めました。ちょうどそのころに知人を介してウポポイの職員募集を知り、応募して採用となりました。

今はクワンノさんと一緒に、体験交流ホールで伝統芸能を披露しています。

ケニ ポンレは、地面から出る花や木など、植物の芽という意味です。本名が賢雄なので、響きが似ていること、これから伸びていく植物の芽という前向きなイメージからつけました。

白老町出身で、父や伯父、伯母などが働いていたので、小さなころからポロトコタンによく遊びに行っていました。1年ほどアイヌ文化とは関係のない仕事をしていましたが、心を許せる環境がなく、家族に相談していた時、「伝承者育成事業」^{*3}の3期生募集があることを知りました。父から、アイヌ文化を学びながらやりたいことを探したらどうかというアドバイスがあり、応募しました。伝承者育成事業修了後に、（一財）

※1 （一財）アイヌ民族博物館

2018年に（公財）アイヌ文化振興・研究推進機構と合併し、現在の（公財）アイヌ民族文化財団となった。

※2 隔月連載「アイヌ文化の振興、現在と未来」

2014年4月号から本誌で隔月連載した記事。ウレシパクラブに所属していたイネトツさんは、卒業研究の一環として、アイヌ文化に携わる人たちへの長時間の聞き取りを行い、その成果をもとに2015年8月号から4回連載でインタビュー記事をまとめた。

アイヌ民族博物館の嘱託職員となり、ウポイ開業前に正職員となりました。

今は体験学習館で、アイヌ語を学んでもらうプログラムを担当しています。

開業前の準備の様子

本田 開業前は、旧社台小学校でアイヌ古式舞踊のレッスンをはじめ、いろいろな準備が進められていましたが、どんな様子でしたか。

ポロナイ 入団後は歴史や文化、芸能など、たくさんの新人研修がありました。覚えることが多く大変でしたが、毎日が新鮮でした。ただ、私が舞踊担当になるとは想像もしていませんでした。体験学習館が管理棟で事務を担当するのだらうと思っていましたが、気が付いたら舞踊グループと呼ばれるようになって、開業前のPRイベントの出張が入り始めました。開業前のイベントの練習では、同僚から歌う時の声の出し方が違うと指摘され、何度も丁寧に教えていただきました。

何十年もかけて身につけるべきことを、非常に凝縮した濃い数カ月間で学びました。経験がないといっても開業日は決まっているので、開業までにほかの皆さんと同じレベルに追いつかなければいけないという焦りと、大丈夫だろうか、本当にステージに立てるだろうかという不安を抱えながら準備をしていました。

コロナ対策で開業が延期になり、2カ月ほど余裕ができた時は、もっと練習ができるのでラッキーだと思いました。クワンノさんは、私とは違う苦労があったと思います。

クワンノ 私が一番気をつけていたのは、一つの舞台をつくるために不可欠なチームワークです。みんなのコミュニケーションが取れていないと、来園者を感動させることは難しいと思っていました。歌や踊りは個々のスキルが出てしまうこと、来園者の評価が厳しいプログラムなので、経験が少ないスタッフへの目配りは意識していました。

先輩たちや道内各地に住むアイヌの人たちの意見を聞いて練習していますが、小さいころからアイヌ文化



に触れてきたわけではないので、歌の発声法などは今でも難しいと感じています。

フッチポ 私は開業直前に採用されたので、みんなに追いつけない、どうしようという不安があり、開業が延期になった時は準備期間が増えてよかったという気持ちでした。今も来園者に対応しながら、同時に練習しつつ、少しずつ追いついている感じです。

入団して早々にコタンでチセの新築祝いがあり、先輩と一緒に儀礼に使う団子を作ったりする中で、いろいろな経験をしながらアイヌ文化について学んでいくことができました。

ケニ 準備期間は、みんなと一緒に踊りや歌、トンコリ（弦楽器）などを研修で教わっていましたが、ある日の朝、アイヌ語担当と言われて、そこからアイヌ語を教えていくプログラムを考えなければならなくなりました。考案したプログラムは、公園を所管している国土交通省と博物館を所管している文化庁との調整が必要でした。

アイヌ語の理解度や普及啓発の重要性の認識は、温度差があります。舞踊や木彫などは目に見えますが、言葉は視覚化できないことも多く、アイヌ語の専門家も少ないため、理解しにくいところがあります。日本語の方言研究に照らしての助言などもありましたが、アイヌ語学習では当てはまらないと思える点もあり、難しい調整でした。結果的には、言語に特化したプログラムと子どもも楽しめるゲーム感覚のプログラムを準備しました。

※3 伝承者育成事業

アイヌ文化に関する知識や技術・技能を3年間で学び、地域で活動するアイヌ文化の担い手を育成することを狙いに、各地のニーズを踏まえて策定した伝承者育成プログラムにより、地域のアイヌ文化を根底から支える人材を育成する事業。



ポロナイ：大河 智桃子さん

開業時はアイヌ語を学んでもらうプログラムが制限され、来園者と一緒に言葉を発することができなくなりましたが、今は体験学習館でみんなが知っている世界の童話や民話をアイヌ語で伝える紙人形劇を開演しています。

ムカラ 私はケニさんと同様に伝承者育成事業の2期生です。修了と同時に（一財）アイヌ民族博物館に採用となり、当初は道内外の資料館や博物館などにあるアイヌ資料の調査を担当していましたが、ウポポイ開業準備から工房担当になりました。工房では木彫や刺しゅうなどの製作体験や実演をしています。

イネトブ 今は国立アイヌ民族博物館の所属ですが、ポロトコタン時代に設立準備室ができていて、展示運営委員会も立ち上がっていました。私が博物館の設立準備室の配属になった時は、展示の大枠がもう決まっていた。旧アイヌ民族博物館にあった収蔵品は旧社台小学校に引っ越したので、収蔵品は社台、展示を検討する設立準備室は札幌という状況で、物理的な距離がありました。決定事項の連絡が入っても、最初からかかわっていないので、何をしたらいいのかと悩んだこともありました。

開業記念の特別展「サスイシリ」は、コロナ禍で急きょ予定していた特別展ができなくなり、短期間でゼロからつくっていかねばならない状況でした。ただ、「サスイシリ」は最初からかかわることができたので、博物館の職員としての実感がわいてきました。2019年11月に博物館の建物が完成し、札幌から設立準備室の

メンバーが白老にやってきて、一緒に仕事をするようになって、本当に博物館の一員になれた感じです。

開業前はムックリづくりやアイヌ文様の切り絵体験など、さまざまなPRを展開しましたが、参加してくれた親子が「オープンを楽しみにしています」とか「漫画をきっかけにアイヌ文化を好きになりました。ウポポイが開業したらぜひ行きたい」などの声をいただき、やりがいにつながりました。

自ら展示物を作ることができる強み

本田 国立アイヌ民族博物館では、樺太のイヨマンテ（クマの霊送り）を再現した展示が一つの見どころです。ほかの博物館では職員が展示物そのものを作る機会はあまりないと思いますが、ウポポイではその技術や能力のある人が集まっています。それがウポポイの強みですが、この展示にはかかわりましたか。

ムカラ はい。開業前は工房のほか、博物館の展示物にもかかわり、樺太のイナウ（木製の祭具）やクマの背中にある飾りなどを再現しました。今はだれも作っている人がいないので、失われかけた技術でしたが、資料を読み込んでみんなで議論して作りあげました。例えば、クマの背中にある飾りは、複雑な編み方で、オオカサゲという植物で作っています。当初はガマだと考えていたのですが、いろいろな研究者とともに資料をよく観察することで、オオカサゲではないかと教えてもらい、調べたところオオカサゲを使うのだとわかりました。資料をよく見ると詳しいことがわかってきて、今では作られていないものも自分たちの力で作ることができました。

今までつなげていただいた技術を残しながら、失われたものを復興していくこと、調べてわかったことを残し伝えていく中で、昔の技術を見直し、そこから新しいものを作っていくことの大切さを感じました。

ただ、一方で大きな課題があります。木彫をはじめアイヌの手仕事を伝承している人がほとんどいないことです。よくアイヌ語が危機的言語だといわれますが、木彫も同様です。工房でプログラムを考えてもそれを

実現できる人がいないのです。

次の世代にアイヌ文化をつないでいくためには、まず現在の担い手確保が必要です。ウポポイではアイヌ文化の伝承を一つの目標に掲げていますが、人材不足はとても大きな課題です。当初、工房の男性職員は私だけで、ようやく今は4人になりましたが、ウポポイは全体的に男性職員が少ないのです。

ケニ 体験学習館でも男性は2人です。

ポロナイ 舞踊グループも男性は7人です。

ムカラ 舞踊やものづくりなど、技術はすぐに身につかないので、人材育成はとても大切で、これからの課題の一つだと思います。

ケニ ウポポイではアイヌ語が公用語となっていますが、どのようにアイヌ語を復興していくかも課題の一つです。もっとウポポイ独自の考え方を示していく必要があるように感じています。博物館の展示解説は外部の研究者の意見もいただいてアイヌ語を積極的に使っていますが、公園全体としては、まだ改善の余地があるように思います。

博物館の皆さんは、言葉の選定の難しさを理解していると思います。スピードが求められることもありますが、研究者の意見を踏まえて言葉を選定するプロセスも大切です。もっと職員の研修も必要で、アイヌ語の発音やアクセントなどでは、まだ目が行き届いていないところもあります。

本田 ウポポイはアイヌ文化伝承のナショナルセンターですから、アイヌ文化の伝承者を育てる教育の場でもあるべきです。来園者への対応とともに、しっかり学んでアイヌ文化の新しい知識をインプットすることも必要です。そうしなければ未来にもつなげられません。そこには学んだことを具現化する喜びがあるはずで、今後はもっと研修や調査に当てる時間の余裕が持てるように願っています。

体験交流ホールで演じる「イノミ」への思い

本田 開業後の手応えはいかがですか。

ポロナイ 歌、踊り、ムックリ演奏も入団してから始



ケニ：山丸 賢雄さん

めました。学生時代からアイヌ文化を学んできたクワンノさんや伝承者育成事業を修了した先輩たちと同じ舞台に立っています。クワンノさんたちが積んできた経験とは重みが違いますが、来園者から同じように拍手をいただいている現実、やはり自信につながります。一方で、経験のあるクワンノさんたちと同じように見なされていることは、プレッシャーでもあります。その責任の重さを認識しつつ、みんなの何十倍も努力しなければいけないと思っています。

舞踊グループは来園者と直接お話しする機会がなく、評価の判断は拍手しかありません。当初は不得意だったムックリですが、修学旅行生の前で演奏をして、大きな拍手をもらえたことがありました。そんなことがあると、「私って、すごい！」とちょっとうぬぼれてしまいます。でも、だからこそみんなの足をひっぱらないように、埋まらない差を感じさせないように、やるしかない日々思いながら頑張っています。

クワンノさんは、いつもムックリも歌も褒めてくれます。仲間に褒めてもらえることも、来園者の拍手をいただけることも本当にうれしいことで、今はそのために頑張っています。

本田 体験交流ホールで披露される伝統芸能は、伝統的な歌や踊り、楽器演奏などを紹介している「シノッ～アイヌの歌・踊り・語り」と、伝統儀礼のイヨマンテを軸にしてアイヌの世界観を表現した「イノミ^{※4}～アイヌの祈り・歌・踊り」(以下「イノミ」)があります。初めて「イノミ」を鑑賞した時は、とても素晴ら

※4 イノミ

新型コロナウイルス感染症拡大対策のため、現在は「シノッ」のみを上演中。「イノミ」の上演は、感染症対策の状況変化を踏まえて再開を予定している。



クワンノ：桐田 晴華さん

しい舞台だったので感動して涙が出てしまいました。「イノミ」の舞台に立つ思いは、どんなものですか。

クワンノ 舞踊グループのメンバーはみな若く、イヨマンテを経験したことも、見たこともありません。活字で読んだり、資料映像を見ただけですが、それを踏まえて私たちが演じるのなら、どんなふうに展開していくのだろうかという、私たちが考えるイヨマンテを一連の流れで展開した舞台が「イノミ」です。

「イノミ」の舞台は、イヨマンテの復興ということもありますが、今の時代感の中で展開するのであれば、こんな姿もあり得るのではないかという、創作プログラムであることです。創作といっても、舞踊グループメンバーが古い映像資料を見て、音声資料を聞いて、復元した歌や踊りをみんなで1から組み立てたものです。私たちが自ら復元したという意味で、ウポポイの中でも、舞踊グループの中でも、とても思い入れのあるプログラムです。

ただ、準備段階は精神的に大変でした。みんなで話し合ったこともありますが、どんな思いで踊るべきかという答えはまだ見つかっていません。私自身は歌や踊りの楽しさを伝えたいと思っています。「イノミ」を演じる格好良さとともに、みんなで一緒に創る舞台ということ表現したいと思っています。

本田 これまでアイヌ文化を伝える中で、舞台でイヨマンテを表現することは、タブーだったように思います。でも、それができたことは衝撃でもあり、「よくぞここまで…」と感動しました。

ポロナイ・クワンノ ありがとうございます。

ムカラ 「イノミ」を紹介するときに、創作プログラムという言葉がついているので、この表現が誤解を生んでいます。創作という表現から偽物のように感じてしまう来園者が多いのです。でも、クワンノさんが説明したように、映像や録音資料などをもとに復元して組み立てているので、ゼロから創作したものではありません。復元しつつ創作したということを理解して、鑑賞してほしいですね。

来園者の反応がやりがいに

フッチポ 舞踊グループの皆さんは来園者とお話しする機会はほとんどないと思いますが、コタンでは来園者と会話する機会がとても多いです。いろいろな来園者がいますが、昔のポロトコタンを知っている来園者がいて、チセの中で踊っていたことが印象に残っているという声を聞きます。

当初はポロトコタンのように、チセの中で踊ることも企画していましたが、コロナ対策でほとんどのプログラムができなくなってしまいました。昔と違う、昔の方がよかったという来園者もいますが、コロナが落ち着いてくれば、コタンのプログラムも充実していくでしょう。

イネトナ 来園者の反応は、博物館でも質問に答える中で感じるができます。準備段階からかかわって苦労してまとめた解説文を来館者が読んでく様子を見ると、「私が担当したところだ」とうれしくなります。

フッチポ 来園者への対応の中では、普段の暮らしを考えるきっかけになると思っています。例えば、食料について、アイヌでは男性が狩りに行き、女性は採集や農耕をしていたと話をしますが、食べ物がある流れでスーパーに並ぶのかなど、日常の中から考えるように投げかけています。特に、子どもたちは自分の暮らしの中から気が付くことがあるはず。そこがやりがいにもつながっています。

私のルーツはアイヌではありませんが、アイヌ文化を通して、自分たちと違う考え方やバックグラウンド、

価値観の違いなど、多様性のある社会について考えるきっかけになってほしいと考えています。

本田 ウポポイは多くの人に気付きを与える場であってほしいと願っています。その一つがアイヌ民族の歴史への理解です。博物館展示ではアイヌ民族が差別された歴史や虐げられた実情などをしっかり伝えるべきですが、それだけだと、抑圧されたかわいそうな人たちというイメージになってしまいます。アイヌの方々には、時代に適応しながら独自の文化を今までしっかり受け継いできたという強い自負があると感じます。これらを両立させながら、アイヌの歴史を表現していくことは至難の業で、そこに博物館の役割があります。どのようにアイヌの歴史や文化を伝えていくかは、今後さらに突き詰めて議論してほしいテーマです。

イネトヲ ポロトコタン時代は白老のアイヌの展示でしたが、国立になって幅広いアイヌ文化の展示になっているので、そこは以前と大きな違いです。

ムカラ 国立博物館としてどんなふうにアイヌの歴史を伝えていくかは非常に重要で、差別や強制労働などの辛い歴史もきちんと伝えていくことが大切です。

例えば、今は昔のような狩猟はしておらず、ハンターとして活動しているアイヌも副業としてしていることが多い。弓矢も今は使っていません。来園者に説明すると「そうか」で終わってしまいますが、使わなくなったのではなく、使えなくなってしまったという歴史を伝えていくことが大切です。伝え方で印象も変わります。

子どもたちや地元の人にもっと寄り添う工夫を

ケニ 私は町内の川沿生活館で開催している「アイヌ語入門講座」の講師も務めています。18時から2時間の講座ですが、周囲に団地があり、子どもたちがたくさん参加しています。講座に参加していた甥が友達に口コミで広げてくれたのですが、ルーツがアイヌであろうとなかろうと、どんなきっかけでもアイヌ語を学ぼうと集まってくれたわけですから、アイヌ語を学びたいという需要があるのだと実感しました。



イネトヲ：竹内 隼人さん

高校生以上はウポポイの入園は有料ですが、中学生以下は無料です。気軽に学校帰りに立ち寄ることができます。でも、少しハードルが高いのでしょうか。地元の人たちは、あまり来園していない印象があります。ある新聞で町民向けの年間パスポートの申請率は3割程度だという記事も出ていました。

大切なことは、次代を担う子どもたちにしっかり引き継いでいくことです。修学旅行生はたくさん来園していますが、地元の学校が授業の一環で訪問したり、保育園児が散歩にくるなど、もっと敷居が低く、子どもたちが自由に出入りできる場であるべきです。そして1つでも、2つでもアイヌ文化を学んで帰る。子どもたちが家に帰ってそれを話してくれれば、今度は家族で行こうとなるでしょう。観光客だけでなく、もっと地元の子も子どもたちが気軽に来園できるような展開ができないかと思っています。

本田 何かいつもおもしろいことをやっているような雰囲気が醸し出されているといいのですが。

ムカラ 今は少し難しいですね。新型コロナウイルス感染症対策という制約があり、博物館が予定していた、子どもたちが自由に触れて遊べる展示など、人と人が接触するプログラムや不特定多数の人が触れるような展示やプログラムができなくなってしまいました。

ケニ 特に、子どもたちの行動を制約することは限界があります。キッズプログラムなど、明確に子ども向けということを表現してプログラムを展開することが難しい。ようやく最近では、雪山を作って雪すべり体験



本田 優子さん

など、子どもが楽しめるプログラムとわかるものが出てきました。

本田 アイヌ文化を受け継いでいくためには、幼いころからさまざまな民具や衣装、優れた工芸作品などに触れ、目や感性を養っておくことがとても大切です。国立アイヌ民族博物館には素晴らしい資料がたくさんあります。子どもたちに喜びや感動を与えつつ、楽しく見てもらえるような展示やプログラムは、今後もっと工夫できるように思います。

海外との姉妹提携と、博物館との連携強化

クワンノ 私がアイヌであることに誇りを持てるようになったきっかけは、海外の人たちとのかかわりです。そこで、海外の人たちとのつながりは、これからもっと作っていきたいと思っています。大学などは海外に姉妹校がありますが、ウポポイも海外の都市や博物館、公園などと姉妹提携を結んで、海外の修学旅行生を受け入れてアイヌ文化に触れていただく。そして、相手先の文化も教えていただく。将来は、そういう交流を積極的に進めていきたいです。

ムカヲ 先住民族への対応は、海外の方が進んでいると感じます。例えば、ノルウェーでは、先住民族のサーミが作る「Duodji (ドオウッチ)」という伝統工芸品がありますが、サーミ学校には伝統工芸を教える独自の教科があり、これらの伝統工芸品の復興や振興、著作権管理などに北欧サーミ評議会が尽力しています。そういう先進事例を参考にして、アイヌの伝統工芸品

の技術の継承と担い手育成につなげていくことが大切です。二風谷や阿寒湖などでは、アイヌの伝統工芸を受け継いで発信するアーティストたちが出てきていますが、まだ限定的な地域です。技術が途切れてしまったからといって、それをないがしろにしてしまっはいけません。アイヌの手仕事の技術を守っていくための制度も必要でしょう。国が指定する伝統的工芸品のように確立された地位があれば、もっと多くの人々が、アイヌの伝統工芸品づくりに興味を持ちます。アイヌの伝統工芸品の地位の確立と、その技術を学べる工芸学校の設立が一つの夢です。

本田 伝統工芸品はもちろん現代感覚のアイヌ工芸品も、産業として確立するには、流通とともに、高価でもそれが当たり前だと思えるようなブランディングも必要です。それは、民間が単独でできることではないので、国の役割に期待しています。伝統工芸品の価値を高める空気感を創出するとともに、アイヌの知的財産権を守っていくことも国の役割でしょう。

ムカヲ ブランド化の道筋ができれば、アイヌの伝統工芸品をつくる人は自ずと出てきます。偽物が出回らないような管理と体制も重要です。

そこで、一つの足掛かりが、ここウポポイでの人材育成です。まずは自分が後輩に伝えられる人にならないといけません。アイヌ文化を引き継いできた先輩に教わりながら、博物館とも連携を取っていくことが重要だと思っています。それを実践できた例が、先ほど話題に出た博物館の樺太のイヨマンテの展示でした。

イネトヲ 私が担当している仕事の一つに収蔵品のデータベース作成があります。管理用と公開用があって、公開用はまだ150点ほどですが、これを充実できれば、工房のスタッフはもちろんですが、ものづくりをしている各地の人たちにも非常に役立つだろうと感じています。希望があれば画像を提供できるような体制ができれば、とても大きな前進になります。

先輩たちと一緒にアイヌの資料を確認すると勉強になります。木彫はどこを詳しく見るのか、刺しゅうはどんなところが気になるのか。それを踏まえて写真の

撮り方も工夫が必要です。今は表と裏の2枚を最低でも撮影していますが、注目すべき点がどこにあるかを知ると、追加撮影するなど、より充実させていくことができます。そんな対応を繰り返して、ウポポイ以外の小さな工房や個人で工芸家として活動している人にも情報を提供できるようになれば、その人たちが次の世代につなげていくことにも結びつきます。

博物館の展示でもいろいろと挑戦しています。5月23日まで開催中の特別展「イコロ展」では「ニ-木材-」を担当しました。素材と技に着目した展示で、X線CT装置^{※5}の画像でどこまで伝わるのか、できるだけ解説を入れないように工夫しました。

これからも経験を積んで、知識をアップデートしていくことの繰り返し、次の世代につなげていくことだと思っています。

ムカラ これからも展示物やものづくりのための調査など、博物館と工房は連携していけると思います。また、それが人材育成にもつながります。

X線調査では、外観だけではわからない構造や製作技法を確認できます。マキリ（小刀）の内側の掘削痕の向きまでわかります。鹿角を使ったマキリも、以前は鹿角をはずさなければわかりませんでした。X線で調べると鹿角の中の木の形もわかります。その調査結果をもとに一緒に作ってみることもできます。

博物館と工房はもっと連携の余地があり、それができることがウポポイの強みでもあります。

アイヌ文化を未来につなげていく思い

本田 ほかの皆さんもアイヌ文化を未来につなげていくことへの思いを聞かせてください。

ポロナイ アイヌにルーツがない私が伝統芸能に携わらせていただいているということもあり、アイヌ文化や芸能を学ぶ環境にとっても恵まれていると実感しています。ルーツがない私だからこそできること、和人でもできるという可能性を、アイヌ文化に携わる和人として少しでも広げていきたいと思っています。アイヌ文化に興味を持ったとき、「ルーツがなくても歌った

り踊ったりしている人がいる」「自分もできるかもしれない」と思える、そんなひっかかりになるような存在になれるとうれしいです。

ウポポイの来園者は、体験交流ホールに入館する方が多いと思います。演出の工夫もあり、ホールは荘厳で、少し仰々しい印象を持たれているかもしれませんが、そんな中で印象に残るステージを創っていきたいと思っています。先日、修学旅行で来てくれた子どもたちが、伝統芸能を見てホールから出ていく時、ホロロセ（鳥の声を模した高音域で巻き舌の音を連続して発する音）を真似していました。そんなふうに関わっていただいてもウポポイで「あんなことを聞いた」「こんなものを見た」ということを印象付けられるステージを創っていきたい。堅苦しくならないようなステージにも気を配っていきたいと思います。

フッチポ 皆さんの話を聞きながら、コタンでできることは何かを考えていました。それは、体感や触れ合いだと思います。再現したチセでは、本を読んで得る知識ではない、その場の空気感を感じることができません。特に、子どもたちにとっては貴重な体験になります。近くで聞くムックリやトンコリの音は、胸に響くものがあります。コロナ対策で今は難しいことも多いのですが、落ち着いたらいろいろなことをやっていきたいと思っています。

白老に住むようになって感じるのは、以前のポロトコタンへの愛着です。私の住んでいるアパートの近くなど、地元の方と話していると、ポロトコタンで働いていた人や土産店をやっていた人など何かしらの接点があり、ポロトコタンが白老とは切り離せないものだったと感じます。その意味でも、まちの人やお店、事業所、施設など、地元の方々と一緒に何かをできるような仕掛けなど、さらに地域に根差した場になっていく工夫が必要かもしれません。

私は、任期付き職員なので任期後はどうなるかわかりませんが、今後もかかわっていきたいと思ったときに閉じられた空間になっては何もできません。ウポポイがもっと多くの人に向かってオープンな形で接

※5 X線CT装置

撮影対象を360度回転させてX線を照射し、透過したX線強度で三次元的な画像を再構成して表示する装置。資料を壊すことなく内部の構造を立体的に把握できる。

点を持てる場になればいいと思います。人材育成という点からも、ウポポイから去るスタッフがいてもここでの経験が無駄にならないような、ひらけた場であってほしい。何かの形でアイヌ文化を伝えていけるような、サポートも大切だと思います。

ケニ 自分が住んでいるまちは、なかなか客観的に見ることができません。外から来た人の方が自分のまちな魅力を発信してくれて、気づかされることはたくさんあります。私も1年くらい離れて、初めて地元が恋しいと思いました。

ウポポイができて、外の人たちが魅力を発信してくれると、町民がまちな魅力を再認識できるきっかけになると思います。ウポポイには、いろいろな人が働いていますから、ウポポイの良さやまちな魅力はどんどん発信していくべきです。

本田 白老という地が果たす役割は、非常に大きいと思います。ウポポイの存在もそうですが、素晴らしい海、湖、山があり、環境は最高です。この地にアイヌ文化が根付き、人々の誇りになっていくためにも、ウポポイの次代を担っていく皆さんには、アイヌ文化を深く理解し、それを具現化した魅力的な空間を創造するために頑張っていただきたいです。

ムカラ 将来は、現在のウポポイの背後の山までを敷地にして、そこで樹木の植生を管理したり、狩猟もできるような、そんなアイヌ文化を実践できる空間になると、さらに夢が広がります。

本田 アイヌ文化は、人間が本来あるべき生き方を教えてくれます。ウポポイが、来園された方々に、ふとふり返るきっかけを与えてくれるような空間になったらとても素敵です。そして、北海道の未来も変えていくような拠点になってほしいと願っています。今日は勉強になりました。ありがとうございました。

プロフィール

イネトマ：竹内 隼人 (たけうち はやと)

1992年札幌市出身。2015年札幌大学文化学部文化学科歴史文化コース卒業後、(一財)アイヌ民族博物館採用。伝承課、学芸課を経て、18年(公財)アイヌ民族文化財団。民族共生象徴空間運営本部国立アイヌ民族博物館設立準備室資料情報室に配属され、現在は国立アイヌ民族博物館研究学芸部資料情報室所属。

クワンノ：桐田 晴華 (きりた はるか)

1993年浦河町出身。2017年札幌大学文化学部文化学科異文化コミュニケーションコース卒業後、札幌市内で就職。19年(公財)アイヌ民族文化財団入団。ウレシパクラブで学んだ舞踊や歌などを生かせる文化振興部伝統芸能課所属。

ケニ：山丸 賢雄 (やままる けんゆう)

1994年白老町出身。白老町立白老東高校中退後、(有)三信工業入社。2017年に第3期伝承者育成事業を修了し、(一財)アイヌ民族博物館を経て、19年(公財)アイヌ民族文化財団入団。体験学習館でのアイヌ語プログラムなどを担当している。

フッチポ：田中 郁美 (たなか いくみ)

1995年札幌市生まれ、東京都育ち。2018年国際基督教大学教養学部リベラル・アーツ学科卒業後、都内で就職。その後、(公財)アイヌ民族文化財団入団。伝統的コタンでのプログラムを担当。

ポロナイ：大河 智桃子 (おおかわ ともこ)

1996年香川県高松市出身。高校時代に先住民族・少数民族に興味を持ち、名古屋外国語大学現代国際学部国際教養学科へ進学。2017年オーストラリア留学。19年卒業後、(公財)アイヌ民族文化財団入団。文化振興部伝統芸能課所属。

ムカラ：山道 陽輪 (やまみち ようまる)

1989年平取町二風谷出身。2008年山道アイヌ職業訓練校木工科入学。11年伝承者育成事業受講。14年同事業修了後、(一財)アイヌ民族博物館採用。学芸課を経て、(公財)アイヌ民族文化財団入団。民族共生象徴空間運営本部文化振興部体験教育課・工房グループリーダー。16年度アイヌ工芸品コンテスト木工・伝統部門優秀賞受賞。

本田 優子 (ほんだ ゆうこ)

1957年石川県金沢市出身。北海道大学卒業後、萱野茂氏の助手として平取町二風谷に移住し、アイヌ語辞典の編さん作業に携わる。2005年札幌大学助教授。その後、アイヌ文化の担い手を育成するウレシパ・プロジェクトを立ち上げ、ウレシパクラブを結成。アイヌ政策推進会議政策推進作業部会委員なども務める。20年12月札幌大学アイヌ文化教育研究センター長に就任。